

日本人形玩具学会人形玩具史研究部会

企画展「千代田の春・江戸東京の正月あそび」

研究会報告書

日時：2020年12月3日(木)13:30~15:30

場所：ギャラリースペース「小さなカルタ館」

(千代田区神田神保町・奥野かるた店2階)

思い出はモノクローム...でも鮮やかな色彩でよみがえる江戸東京の正月あそび

展示会開催の挨拶.....葛西好文

企画の趣旨、内容、方法.....江橋崇

主要展示品説明

羽根突き、凧あげ.....林直輝

百人一首かるた.....奥野誠子

いろはかるた、トランプ.....江橋崇

馬のあそび.....葛西好文

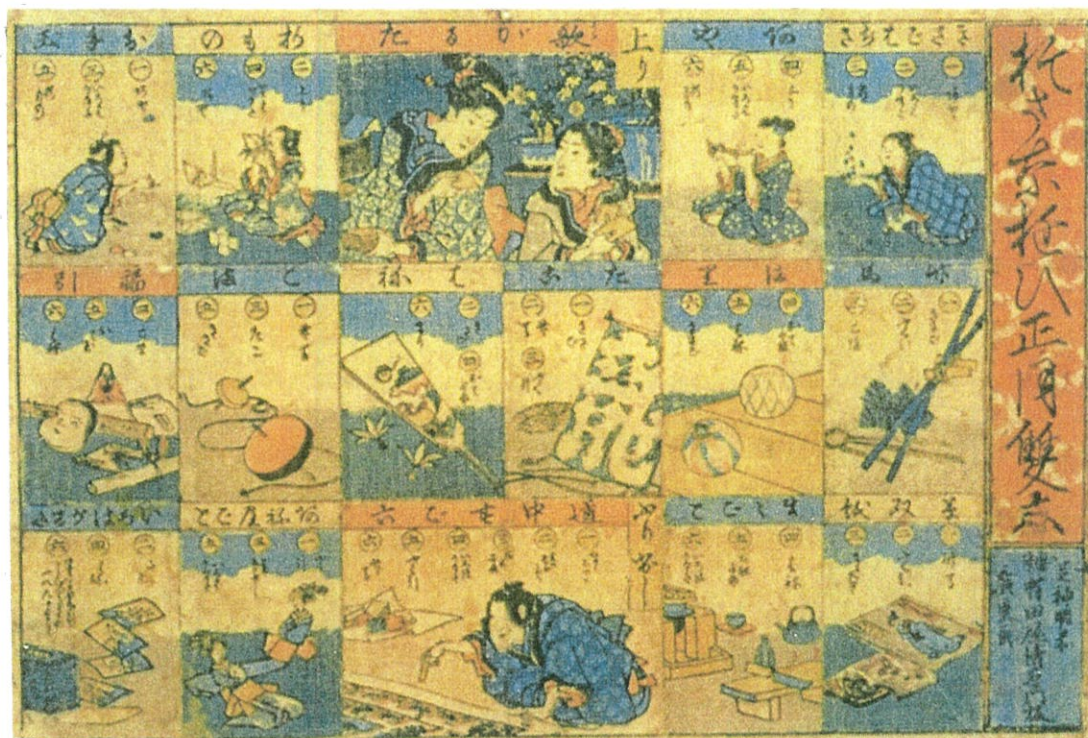
正月あそびのミニチュア.....川内由美子

正月あそびの多彩な世界.....奥野誠子

〈休憩〉

参加者からの感想、質問

締め言葉川内由美子



おさな遊び正月雙六 (歌川廣重画、有田屋清右工門版、天保14年~弘化3年)

表紙絵について

この報告書の表紙絵は、天保末年頃に江戸、芝神明前の有田屋清右エ門方から出版された、歌川廣重画の「おさな遊び正月雙六」を用いました。これを見ると、江戸時代後期の江戸での正月あそびの様子がよく分かります。ここでは、「ふりだし」の「道中すご六」に始まり、(図版右下より)「草双紙」「まゝごと」「あね屋ごと (姉様ごっこ)」「いろはがるた」「竹馬」「まり」「たこ」「はね」「こま」「福引」「きさごはぢき」「あや」「折もの」「お手玉」と続き、「歌かるた」が「上り」です。今回の展示では、アンダーラインを付したものを取り上げて、さらに「馬のあそび」「トランプ」「ゲームカード」「福笑い」「ぶりぶり」「パズル」「囲碁」「将棋」を加えました。江戸から東京に繋がる正月あそびの伝統を汲み取ってくださると嬉しく思います。

展示会開催のあいさつ

コロナ禍で大変ななかをお越しくださりありがとうございます。お正月は、もともと、門松をたてて「歳神様」をお迎えし、家族一同が静かに過ごす「物忌」の期間です。身分差が厳しかった江戸の時代でも、近代の東京の時代でもかわりなく、家族そろっての祝い膳でおいしい正月料理を食し、仕事を休んでのんびりと過ごし、皆で楽しくあそび、親睦と友愛をふかめ、お互いにこの一年も扶助、協力しあって暮らすことを約束する時でした。

コロナ禍のなかで、こうした絆をふかめる正月あそびの楽しさや価値が再認識されています。私たちも協力しあって、江戸東京の正月あそびを再現してみました。皆さまが、あの楽しかったころのお正月を思いだされて、今回の「巣ごもり正月」でも今の家族でそれを再現されて、そこからコロナに打ち勝ってこの一年を生きる活力を生みだされれば幸いです。なお、今回の企画について、千代田区、千代田区商店街連合会、神田古書店連盟から温かい励ましとご支援をいただきました。厚く感謝申し上げます。

さあ、江戸時代から文化の中心地であった千代田の地から、万華鏡のような年末、年初の風物詩、江戸東京の正月あそびの世界をご覧ください。

一般社団法人日本人形玩具学会
人形玩具史研究部会有志
株式会社奥野かるた店

今回の企画の趣旨、内容、方法

皆さま、こんにちは。人形玩具史研究部会の江橋崇でございます。今日は、コロナ禍で大変な中、この研究会にお集まりくださいます。誠にありがとうございます。それではこれより、プログラムに従いまして、この展示企画の準備に参加させていただいた私から、企画の趣旨、内容、方法について簡単にご説明させていただきます。よろしくお願ひいたします。

1) 企画の趣旨

2020年は、コロナ禍で私たちの日本人形玩具学会の研究活動も停滞、沈滞しています。多くの会員が孤立し、お互いのコミュニケーションが不十分です。この不本意な研究状況を何とか改善するには、ポストコロナ、ウィズコロナを見据えた研究学会らしい活動、新しい企画にチャレンジしなければなりません。

ここで注目されるのは、コロナ対策の自粛期間中に注目された引きこもり家庭での家族、友人との対面あそびです。そして東京は、江戸時代から今日までの長い期間、庶民の遊戯の伝統を培ってきました。私たちの学会には、この地に伝わる伝統遊戯について、そのピークである正月あそびに光を当てる展示と研究会を開催して、江戸・東京風の家庭遊戯の価値を見直し、現代家族でのその活用をあらためて問ひかけることができる力があります。

幸運なことに、東京都千代田区神田神保町の奥野かるた店二階にあるギャラリースペースを年末から年始にかけて貸していただけることになりました。そこで、人形玩具史研究部会の有志五名が集まって、この企画を実現することができました。

もう一点、私たちが注目したのは、コロナ禍のもとで急速に進行している社会のデジタル化です。テレワークの推進やオンライン授業の増加など、仕事や教育の場面でのデジタル技術の活用は目を見張るようなものがあります。そこで私たちは、これを活用して、感染防止のために神田神保町での展示、研究会会場に来にくい会員にもオンラインで参加できるように企画しました。今回はこの研究会の報告を学会のホームページ上で公開します。これが学会としての会員向けのデジタルなサービスの増加になり、現在、会員に定期的に郵送している学会通信と並ぶ新しい情報提供の形になり、さらに、学会の研究成果の国内外への研究者への発信、アピールにもなることを希望します。

2) 企画の内容

今回の企画は、上記の五人が、各々遊戯史に関わるコレクションを持ち寄って展示するところから始まりました。葛西好文の「馬の遊戯」、林直輝の「凧」と「羽子板」、川内由美子の「ミニチュア」、江橋崇の「かるた、トランプ、ゲームカード」、奥野誠子の「百人一首歌かるた」のコレクションです。でも、せっかくすばらしい展示施設を活用できるのに、企画が

一部に偏りすぎて展示施設のキャリアに汚点を残さないかが心配でした。そこで、改めて正月あそびとして社会的に通用しているものの中身、その範囲を事前調査して、正月あそびとして普通に社会的にイメージされる範囲をカバーするように、「コマ」「手鞠」「お手玉」「福笑い」「パズル」「紙双六」「囲碁」「将棋」などの展示にも挑戦しました。

次に、この企画では、江戸・東京の正月あそびにこだわりました。江戸時代の江戸の文化は、今日の行政区画で言えば、都心五区(千代田区、中央区、台東区、文京区、港区)がセンターでした。今回の企画では、こうした時代からの伝統遊戯を扱うことを示す言葉として「千代田の春」と題することにしました。明治時代以降には、東京は膨張を続けて、今日では切れ目なく神奈川、多摩、埼玉、千葉にまで東京の文化が広がっていますが、この題名には、ちょっとですが、生粋の江戸っ子の文化という自負が入っています。

今回、もう一つこだわったのは、大正、昭和前期の東京の遊戯を含ませることです。江戸・東京と言うと普通は明治時代までの過ぎ去った過去の文化を思い起こしますが、東京はそれだけでなく、大正から昭和の初めにかけて、大正ロマン、昭和モダンの発祥の地でもありましたし、第二次大戦後は、アニメやキャラクター、そしてデジタルなゲームなど、緩くてかわいい文化の発信地として世界的に注目されています。現代の遊戯文化をそれ以前の伝統的な遊戯文化とつなげてみて、何が継承され、何が新しく出発できて今日の東京に繋がっているのかを考えてみました。

そして、こうすることでもう一つ光を浴びるのが、江戸・東京の女性が進めてきたあそびの文化です。大正ロマンは、女性の覚醒が生み出した文化でして、今では世界的にも注目されています。ニューヨークやロンドンで、大正時代のモダン着物を愛用している女性が増え、「カツカレー」のような日本風の洋食が好まれ、「かわいい」ものが世界に流通し、もちろん、東京を訪れて都市の風景、人々の生活に溶け込んで一緒に楽しむインバウンド需要も増えています。女性のあそびの文化にもっと注目が集まるべきであり、それに最も適しているものの一つが、遊戯史の世界の研究と情報の発信です。展示ではわずかのスペースしか割く余裕がありませんでしたが、江戸から東京へと時期をまたいで展示して、江戸・東京のあそびの文化は女性と子どもが主役、ということアピールしました。

3) 企画の方法

今回の企画を進める中で最も心を配ったのは、「生きた遊戯の展示」を表現することです。これまでの人形玩具史関係の展示会などではどうしても「遊戯具の展示」に偏りがちでした。私たちは、遊戯の風景を描いた江戸時代の錦絵史料と、明治時代以降の絵葉書史料を投入して、正月あそびを楽しむ人々の姿を示し、その楽しい空気感を演出しました。

子どもや大人の遊戯場面の絵画史料は、その量がとても少ないうえに、その年の正月という短期の需要に応えたのちにはすぐに廃棄されてしまい、かげろうのように消え去ってしまい

ます。しかし、最近の社会史研究や情報社会学では、こうした史料を、ギリシャ語の「かげろう」、エフェメラという言葉で呼んで、活発に利用するようになりました。正月用品として短期間の需要に応えるだけの、まさにかげろうのように儚い絵画商品であるだけに、その瞬間に購入者に受け入れてもらえるように、その瞬間に市場での競争に勝てるように、消費者が手に取りやすいようにアピールしていますので、その時代の世相や人々の流行、好み、遊戯の場の空気感などを強く反映していて、貴重な史料になっています。そして、江戸時代の錦絵や近代の絵葉書は、代表的なエフェメラ史料と位置付けられています。この企画では、ここに注目して、とても希少な遊戯図の錦絵や絵葉書コレクションからイメージを写し取り、「生きた遊戯の展示」を実現しようと試みました。展示会場では、壁面の遊戯画像と陳列棚の上の遊戯具のコラボで、過ぎ去った日々の江戸・東京の遊戯風景を思いだしていただきたいという私たちの狙いを実現できていれば嬉しいです。

でも、このように考えたからと言って、画像ばかりに集中して遊戯具の展示をおろそかにしたわけではありません。スペースの制限で品数は絞らなければなりませんでしたけど、他では見られないすばらしい遊戯具の史料を並べることができました。五人のメンバーは、各々、長年の蒐集で得た大事な史料を提出しました。中には本邦初出という史料もあります。日本で最古とか唯一とか言われるものもあります。展示されている遊戯具は充実しており、それを見る人に生き生きと語りかけています。

以上を通じて、今回の企画では、江戸・東京の期間を通じて、遊戯具資料約 150 点、絵画史料約 80 点を展示し、会場に足を踏み入れればたちまちのうちに正月あそびを楽しむ当時の人々の姿を見つけ出し、その場の空気感を実感できるように心がけることができました。

他方で、情報の発信面では、デジタル化なくして今後の学会活動はないという覚悟をもって準備に取り組みました。それは私たちにとっては身のすくむ思いのする大きな壁でしたが、人形玩具学会の小林照子さまのお力をお借りして、何とか今日の状態にまで漕ぎつけることができました。今回は報告書の制作に力を入れました。人形玩具学会のホームページに載せましたので、コロナ禍でこの会場までいらっしゃることが難しい方々、特に東京から距離のある地域にお住いの方々にも企画の内容をお知らせすることができます。また、まだ数はさほど多くないのですが、遠く海外から私たちの研究にご関心をお寄せいただいている研究者や日本の遊戯文化のファンの方々にも情報を画像で提供できるようになりました。大きな喜びとともに、お二人のご協力に心より感謝申し上げます。

もう一つは、作業の進め方の提案です。私たちは「やりがい搾取」はやめようとなりました。日本の研究学会では、多くの場合、若手の研究者はその学会の幹部である所属機関の指導教授の指図の下で、学会の事務などを無償で行うのが普通でした。それは、各々の大学、研究機関での指導あるいは将来の進路のあっせんなどと引き換えかもしれませんが、収入も不安定な若手研究者には、研究の時間を奪われる、心身ともに疲労する負担になっています。日

本人形玩具学会も、研究者としての将来の利益と引き換えにできるほどの力もないのに、事務や作業の担当者への一方的な「やりがい搾取」がずっと続いてきました。これを改めて若手の研究を阻害しなくて済むように、今回の企画では、僅少ですが作業を手伝っていただく場合には謝礼を支払います。実際には最低賃金法の最下限にも届かないいわゆるボランティアレベルの報酬しか提供できないのですが、このことに込めた私たちの反省の気持ちをご理解いただければ幸いです。

4) 感謝

最後に、私たちの感謝を申し上げたいと思います。まず、企画の会場をお貸しくださった株式会社奥野かるた店と、一年で一番業務繁多な時期であるのに、お時間を割いて計画の立案や広報、実際の展示の準備、会場の設営などでお示しいただいた、同店の従業員の方々の全社挙げてのご協力に深く感謝申し上げます。

次に、「千代田の春」と言われては放っておけないと、弱者にやさしい江戸っ子気質で応援に駆け付けてくださった、地元の千代田区、千代田区社会福祉協議会、千代田商店街連合会、神田古書店連盟、神田神保町のご近所様に感謝申し上げます。地元からのご協力なしにはこの企画は成り立たなかったと思われます。また、年末、年始のステイホーム啓発に向けた「ウィズコロナ東京かるた」の制作に私たちの研究の成果をご活用くださった東京都にも熱くお礼申し上げます。今日の未曾有の大きな病苦に立ち向かう都の闘いの一端を担えたことは、日本人形玩具学会の、一般社団法人としての信頼と課題に応える機会となり、心からありがたく思い、誇りとするところです。

最後の最後に、仲間内の褒め合いになってしましますが、人形玩具史研究部会の仲間の皆さまに感謝申し上げます。私たち五人の企画の準備が急速に進行したので、皆さまに十分にお伝えすることもできなかったのに、こうしてお心広くご理解くださり、この研究会にもご参加下さり、また、企画の宣伝や会場でのコロナ対策での当番ボランティアにもご協力下さり、深く感謝しております。皆さまのご熱意に励まされて、今日のこの研究会の開催にこぎつけることができました。今後も共に協力しあい、人形玩具史研究の面でも、デジタル社会での研究学会の発展の面でも、ともに頑張っていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

以上。短時間でしたが、今回の企画の趣旨、内容、方法についてご説明させていただきました。ご清聴を感謝いたします。

主要展示品の各担当者からの報告

羽根突き

江戸では、江戸時代後期の文化・文政頃に歌舞伎役者の舞台姿を押絵にして取り付けた華やかな「押絵羽子板」が誕生しました。以来、年末の歳市の市では特に女性たちが最員の役者のものをこぞって買い求めましたが、それは現代、アイドルの写真やイラストが付いた団扇などのグッズをファンが求める気持ちと何ら変わらないところでしょう。

江戸東京の押絵羽子板は単に羽根突きあそびの道具であるだけでなく、工芸美を備えた縁起物としても発達してきました。めでたい末広がり of 定形のなかに、歌舞伎の名場面をいかに躍動感豊かに再現できるかが生命であり、あたかも板を舞台として、そこに芝居の最高潮の一瞬を表現するためには、作者自身が歌舞伎に精通し、衣裳や隈取、所作等の決まり事を熟知したうえで、それを自在に表現できる技術を有していなければならないのです。

令和元年（2019）11月、東京都・埼玉県・神奈川県を産地とする押絵羽子板が主製品の「江戸押絵」が、経済産業大臣指定の「伝統的工芸品」となりました。それにより、100年以上の歴史を有する原材料、技術・技法によって製作された押絵羽子板と、そうではない新素材を用いた量産品などとの区別が明確となりました。羽子板職人らによる「東京歳の市羽子板商組合」は、伝統的工芸品指定を契機とした差別化に期待していますが、その行く末は、決して他人事ではなく、消費者たる私たち国民の文化度にかかっているといえましょう。

今回は、押絵羽子板草創期の貴重な実物遺品と、明治時代から現代までの各時代を代表する名工の作品を展示いたします。押絵羽子板の美をご鑑賞いただければ幸甚です。（林 直輝）

凧揚げ

江戸東京の伝統的な凧は現在、「江戸凧」の名で知られていますが、それは総称として昭和戦後に愛好家たちの間から呼ばれるようになったもので、古くは単に形態から「角凧」や「奴凧」、図柄から「絵凧」や「字凧」などと呼んでいました。

江戸の凧の最大の特徴は、凧に描かれた絵「凧絵」が重視されていることでしょう。飛翔機能的には特別に優れているわけではない長方形の凧も、絵を描くには最適であり、あたかも錦絵さながらに彩られた豪華な凧絵は子どもも大人も魅了して、天保12年（1841）頃には禁令を出さなければならないほどに発達しました。しかも、際物としての性質上、速く、安く、大量に、見栄え良く描くことが求められた結果、独特の様式美を完成させたのです。

今回は、遺例がきわめて少なく世界的に貴重な江戸時代の凧絵の実物遺品と、昭和時代を代表する凧絵師として活躍し、単なる玩具として軽視されがちだった凧の評価を高めた功労者

といえる故・橋本禎造氏（1904～1991）の作品を中心に展示いたします。特に、製作年代の異なる同画題作品を展示することにより、東京の凧絵が時代とともにいかなる変化をみせたのかを実物資料によって示します。また橋本氏の先輩格であった今井龍谷氏（1896～1981）と両氏の薫陶を受けた沼倉寅治氏（1919～2001）の作品をあわせて展示しますので、それぞれの作風を比較しつつ、お楽しみいただけることでしょう。民衆的絵画の華というべき勇壮な美をご鑑賞いただければ幸甚です。（林 直輝）

百人一首かるた

百人一首は江戸時代にかるたとして遊ばれるようになりました。当時の百人一首のかるたは上の句札と下の句札に分かれていました。明治時代になると、読み札と取り札に分かれるようになり、文字がくずし字から楷書体になり、現在遊ばれている百人一首の形になりました。当時はこれを「競技かるた」「標準かるた」と呼びました。

今回の展示では、百人一首の遊戯を偲ばせるような展示をしようと思い、絵画と奥野かるた店の先代の会長が集めたかるた札で表現してみました。展示品としては、まず、江戸時代後期の高級品の手書きかるたを用意しました。江戸の武家屋敷や上流の商家などで実際に遊ばれていたと思われるものです。「散し」と呼ばれる遊戯方法の場面を表してみました。

次に、明治時代の木版かるたを用意しました。この時代、収納箱は江戸時代の黒漆塗りのものから一変して、樺や柿などの木材の細工品となり、カルタ札は木版、石版、機械印刷など、需要に応じて考案されたいかにも明治のものでございます。札の配置は、この時代に新しく始まり、家庭の百人一首かるたの遊戯品目ではとても人気があった「坊主めくり」の場面展開にしました。みな様も、お正月にこの遊戯で遊ばれた思い出があるかどうかと推察します。

もう一つは、「百人一首標準かるた」を用意しました。このかるた札を、やはりこの時代にはじまった「競技かるた」の「源平戦」の場面になぞらえて配置しました。このかるたは、下の句札、取り札が同じ大きさの平仮名であり、競技に際して不公平が生じないように工夫されています。ただ、その分、和歌文化の遊戯具としての情緒は薄れて、スポーツ遊戯の遊戯具らしい趣になりましたけど。

一方、絵画史料では、明治時代のかるた会の情景図数枚と、大正ロマンの時期の、女性がこのカルタ遊技を楽しむ場面の絵画数枚を並べてみました。カルタ会の風景の中の女性から、個性を持ってこの遊戯に接する覚醒した女性への変化がはっきりと分かると思います。女性が思いを込めてこの遊戯を愛好し、流行を主導したことに思いをはせていただければ幸いです。

奥野かるた店には先代の会長が残された数多くのかるた札のコレクションがございます。これまでも折々に展示してまいりましたが、今後もそれに努めますので、どうぞご来店くださり、お楽しみください。(奥野誠子)

いろはかるた

私の担当は、江戸・東京のかるた、トランプの紹介です。このうち「百人一首歌かるた」については、奥野誠子会員にお任せして、私はその他の「イロハかるた」と「トランプ」を担当しました。かるたでは、江戸時代の初期から京都、大坂を中心に実に多様な遊戯と遊戯具が開発されていて選択に迷いますが、今回は思い切ってもっとも江戸の文化らしい、江戸時代に考案された「犬棒かるた」に絞って紹介することにしました。

「かるた札」はほとんどその年限りの使用を予定した消耗品であって簡単に捨てられるので残されていないし、文献もほとんどないので、歴史研究は困難です。私が研究を始めた数十年前には、文化文政期に葛飾北斎が考案した初期の「イロハかるた」だと鑑定されていたものがありましたが、その用紙や顔料、色彩は幕末期以降の印象が強く、違和感が残りました。私は、幸い、本当に古い、天保年間、1830年代頃のかるた札を見つけました。今回、初公開していますのでご覧ください。

「犬棒かるた」は江戸で大流行しまして、幼児が四歳、五歳になると家族が「いろは」の文字を教える最初の教材として、暮れのうちに買い求めて正月あそびで家族そろって遊ぶ仲間に入れてあげました。まだ字がよく分かっていない子のために読み手の祖母が「論より証拠 藁人形」とか、「楽あれば苦あり 千両箱」「油断大敵 火がぼうぼう」などと絵の説明を一言加えたり、末の子が憶えた得意札には上の子は手を出さないという暗黙のルールがあったりする、楽しく優しい家族の遊戯でした。

「犬棒かるた」は、幕末頃には流行色の赤色を入れて、販売時に一番上に来る「い」の絵札を真っ赤に彩色する「赤犬棒かるた」になり、明治30年代には和紙から洋紙へ、木版印刷から機械印刷へと進化して、全国に普及しました。「い」の字札も真っ赤に塗る例も増えました。そして、大正時代になると、子どもの遊戯具が発達する中で、さまざまなバリエーションのものが開発されました。今回は島崎藤村が言葉を考え、岡本一平が画を描いた「藤村イロハ歌留多」を展示しました。この時代に吹いたモダンな風の中で、東京とその郊外で成立した新しい家庭遊戯を感じてくださるとうれしいです。そして昭和前期になると、子どもの遊戯文化が花開いて、新進の武井武雄や松本かつじらによる新デザインのいろはかるたが登場し、子どもたちの人気を集めました。今回は、奥野かるた店が復刻した武井武雄の「いろはかるた犬ぼう」を展示しています。こうした子どもたちに人気の「いろはかるた」は、戦争中も各家庭で大事に使われました。

戦争は東京のかるた業界に壊滅的な打撃となりました。空襲で、工場は焼かれ、多くの関係者が亡くなり、かるた札の材料になる紙もありませんでした。しかし、かるたの制作者の立ち上がりは素早く、何とか用紙も確保して生産を再開しました。まずは横山隆一や秋好薫、新進の長谷川町子たちが描いた新聞漫画のヒーロー、次いで人気ラジオ番組、テレビ番組の主人公、有名スポーツ選手、映画俳優、そしてテレビのアニメやキャラクターなどが次々とかるたになりました。今回は少し変わった、安野光雅が言葉も画も考案した「キリガミいろはカルタ」を展示しました。(江橋崇)

トランプ

トランプは、明治10年代の終わりに輸入が解禁され、新しい西欧の文化の風となって、東京銀座発で日本中に広まりました。当時の教則本を展示しました。代表的な三点が揃っている例は他にほとんど聞いたことがありません。ただ、表紙ばかりをお見せして、中身をお示しできないことをお詫びします。この時期で注目されるのは、大人の間での流行よりも子どもの流行のほうが早く、日本では、トランプと言えば「七並べ」「ババ抜き」「神経衰弱」の「御三家」中心に子どもの文化として広まったことです。

明治30年代に、京都のカルタ屋、山内任天堂がアメリカから中古の制作機械を買い入れて、最初から国際水準に達したトランプを制作しました。これをうけて明治時代の終わりから大正時代になると、都市に生じた近代的な核家族の家庭で、覚醒した女性たちがこれを好み、大正ロマン、昭和モダンの大事なアイテムになり、東京や関西のモダンな家庭での家族遊びに用いられました。今回は神戸市のウィルキンソン社のPRカードを展示しました。わざわざイギリスで制作させた高級品が日本製の収納箱に収められています。贈られた得意先の上流家庭の応接間で遊ばれていたものです。この時期には、竹久夢二や落谷虹児、高島華宵、中原淳一らの流行画家たちも好んでトランプに興じる女性を美しく描きました。それは、東京を中心に栄えた女性中心の大正ロマン、昭和モダンの世界を思わせてくれます。(江橋崇)

ゲームカード

もう一つ、今回紹介したのは、江戸東京のパーティーゲームに用いられた、さまざまなゲームカードです。江戸時代の終わりには、いろいろなお座敷遊戯、パーティーゲームが開発されました。一番盛んだったのは「藤八拳」、別名「狐けん」、「庄屋けん」です。最初は芸者のいる賑やかなお座敷で、三味線などで囃し立てられる中で、客の男性と接待の芸者たちが「庄屋」「獵人」「狐」のポーズをとって競う身体遊戯でしたが、それがカードゲームに転じ、明治時代になると家庭に入って子どもの遊戯に移り、家族や友人の正月あそびでも多用されるようになりました。同じようなゲームカードには「鳥刺し」や「お茶ぼうず」などもあり、明治中期にイギリスから伝来した「家族合せ」も加わって大人気になりました。「庄屋けん」

の身体遊戯は「ジャンケン」遊戯になり、そのカードゲームは「庄屋券」になり、「紙メンコ」になりました。

こうしたゲームカードは人気の上がり下がりが激しく、カードは消耗品ですぐに消滅し、その流行の記憶さえ消えてしまいます。それではあまりに残念なので、今回は辛うじて残ったカードを集めて展示してみました。また、大正ロマンの時期の、画家の落谷虹児、須藤重、岩田専太郎たちの自描画家族合せカードなども初めて紹介させていただきました。東京の家庭で、にぎやかにはしゃぐ子どもたち、わいわい集まって家族のパーティーゲームに興じる大人たちの様子を想像してください。

かるた、トランプ、ゲームカードは一過性の消耗品です。ですから、いま目の前にいる買い手の女性や子どもたちに気に入ってもらおうと、安価で粗末な作りでも懸命に着飾っています。わずかに残された品々ですが、展示した遊戯の画像と合わせ見て、江戸東京で先祖が生み出してきた楽しい正月あそびの伝統に思いをはせて、今のご自分のご家庭、ご家族でその思いを受け継いで、同じように楽しく巣ごもり正月を過ごしていただければ本望です（江橋崇）

馬の遊び

正月のあそびに、馬と戯れるものがあります。江戸には、大人に乗馬はじめがあれば、子どもにも着飾って馬に乗るあそびがありました。また、正月には、生活に欠かせない友であった馬との関係を飾る「初馬」や「白馬節会」などの行事や神事があり、子どもには「春駒」や「竹馬」のあそびがありました。

日本の馬と人との付き合いは江戸よりはるか昔の古墳時代頃からとされています。馬は人とのつながりでは犬より遅いものの、軍事や政治などのかかわりは深く、強く、遅く、自動車が誕生するまでは一番早い乗物でした。また神事との繋がりも深く、神の乗りものとして清く、気高いイメージがあります。そして賢さ、優しさ、可愛らしさだけでなく、癒しを与えてくれる動物として、また、生活に役立つ家畜として、そして遊びの世界でも親しまれ、動物の中でも犬と並び玩具が多いといわれています。

<春駒> 馬の頭を作り、竹にさし、末端に車を付けた玩具です。子ども達は新春これにまたがって春駒遊びを楽しみました。平安時代には笹竹にまたがって乗馬の真似をして遊び竹馬とよばれました。『守貞謾稿』には「馬の頭を練り物でつくり竹にさし、片方の先に小車二輪を付け、首の継ぎ目に紅絹で包む。江戸では竹馬と言わず春駒という」とあります。浮世絵、絵画も数多く登場し、歌舞伎舞踊の所作事で手に持って踊る姿が描かれ、また人形も作られました。今回の展示では、①春駒遊びの御所人形(永徳齋)、②賀茂人形、③春駒(5体)、④馬杓、⑤春駒の掛軸2本(巖谷小波画)、⑥明治天皇騎馬人形、⑦練習用木馬を展示しま

した。

<神馬> 馬は神の乗用の料として神社に生馬に代わって木製の神馬や絵馬を奉納する風習が古くからあり、平安鎌倉時代から鞍を置いて飾り立てた飾り馬があり、伊勢神宮の式年遷宮においても神宝の飾り馬が奉納されます。今回の展示では、金銅の金具で華麗に飾り付けた五月人形の飾り馬と、祭礼神事の神馬を展示しました。①唐鞍神馬（塗上）唐様式の鞍で、馬の顔面に銀面、轡（くつわ）、輪鐙、雲珠（うす）や杏葉（きょうよう）など金銅の金具で華麗に飾りつけた神馬、②「祭礼神馬」（奉書） ①と同様写實的、細密な技巧による華麗な神馬、③「神馬と口取り」（塗上）祭礼の為に紋入りの胴巻と鞍に鑑と榊奉幣を載せた神馬と差縄（さしなわ）を執る口取り、を展示しましたのでご覧ください。

<競馬香> 今回の展示は、馬にまつわる遊びということで、神事である「白馬の節会」と同様宮廷で行われた、京都上賀茂神社（賀茂別雷神社）の端午の節句に行われている競馬（くらべうま）神事に由来した競馬香の遊戯具を出品します。これは五百年の歴史を持つ香道で行われる四種磬（ししゅばん）という代表的な磬ものの組香（競馬香、源氏香、名所香、矢数香）の遊戯で、それに必要な道具を一つの箱にまとめてあります。この遊戯では、焚かれた香を当てることを競い、得点の結果を盤上の人形（香人形）を動かして示しますが、競技は人形が馬に乗らない状態で始め、正解すると乗馬し、馬場を模った競香盤で馬を進めます。相手と四間（こま）遅れると落馬とするなどルールは流派により異なりますが、ゴールにある勝負の木に先に到達すると勝ちになります。なお、あわせて、江戸時代後期、七澤屋製のミニチュア、雛道具の競馬香も展示しました。

<競馬の遊戯具> この他に、競馬の遊戯具として、①洋式競馬をボードゲームにした「PONY RACE」（ポニーレース）があります。手動の糸巻取り式ゲームで制作時代は不明です。コースを描いたシートは別物ですが同種の遊戯に用いたものでしょうか、双方が今回初めて出会ったのですが、ぴったり合いました。②「火の走る競馬」（導火線が刷り込まれたカード式ゲーム）があります。スタートの地点に線香などで火をつけて、各コースの炎が燃えつく速さで順位を競います。③「JEU DE COURSE」はレバーをひく円盤回転式競馬ゲームで、フランス製です。（葛西好文）

正月あそびのミニチュア

ミニチュアで再現する江戸時代の正月あそび

この度の展示では、江戸時代の「正月風俗図屏風」に描かれた遊戯を当時のミニチュア細工である雛道具で表現することを試みました。この屏風には古くから文人のたしなみとされた琴棋書画が描き込まれています。それを江戸時代後期に一世を風靡した、江戸下谷池之端に

あった手遊び小細工物の名店、七澤屋製雑道具の楽器・囲碁・書物・硯箱によって再現し、また同時に貝桶・貝覆い（貝合わせ）の遊戯場面も再現してみました。

貝覆いの遊び方には諸説ありますが、この屏風絵に倣い実際にはこのように遊ばれたことが多かったのではないかと思われる、トランプの「神経衰弱」風な並べ方にしました。つまり、二枚貝である蛤を2つに分け、それを伏せてたくさん並べ、その正しい組み合わせを当てるわけですが、ぴったりと合うのは元々の組み合わせしかありません。それを何十もある貝から見分けるのは大変そうに見えますが、実は一対の蛤の表の模様はほぼ全く同じなのです。ですから、注意深く見れば正しい組み合わせを当てることができます。当然、貝覆いの遊びの開始時はわかりやすいはっきりとした模様の貝から取られていくことでしょう。だんだんに白っぽい貝ばかりになっていき、ここからが遊びとしてのおもしろいところ、まさに「神経衰弱」になっていくのです。蛤を伏せて飾ったところ、改めて貝の表の模様の美しさにも気付きます。

七澤屋の貝の長径は約2センチ、これは月齢20くらいの貝です。蛤は、同じ時期に同じ場所にまとまって発生するので、同じ大きさの貝をたくさん集めることは可能であったようです。

ミニチュアで再現する近代の正月あそび

長谷川町子作の「サザエさん」に描かれた正月の風景は例えその時代の経験がなくとも、不思議に懐かしく心温まるものです。それを背景に明治時代から現代までの江戸小物玩具やドールハウス小物、食玩も使って再現してみました。

正月には老若男女、上下の垣根も取り払ってあそびに夢中になったものです。この会場内に展示された絵画資料にもそんなほほえましい場面がたくさん見られます。多くの家庭では小さい子供も一緒になって、お父さんやお兄さんに勝つこともできるようなゲームで楽しく遊びました。難しい百人一首にも「坊主めぐり」という簡単な遊び方がありましたし、碁石を使った「五目並べ」や花札の「花合せ」も子供が遊べます。

家庭で古着の切れ端などを使って、お祖母さんやお母さんが着物を縫って着せた豆市松人形、ミニチュアトランプでの「神経衰弱」の場面、鏡餅や年越し蕎麦など、楽しい正月の団欒を思い浮かべられるような展示を試みました。（川内由美子）

「千代田の春 江戸東京の正月あそび展」 展示会場風景



奥野かるた店一階入口表示



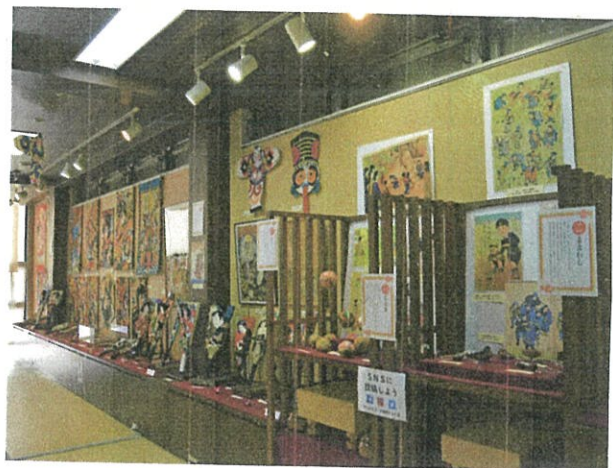
階段壁面の遊戯場面画像



階段上の開催のあいさつ文



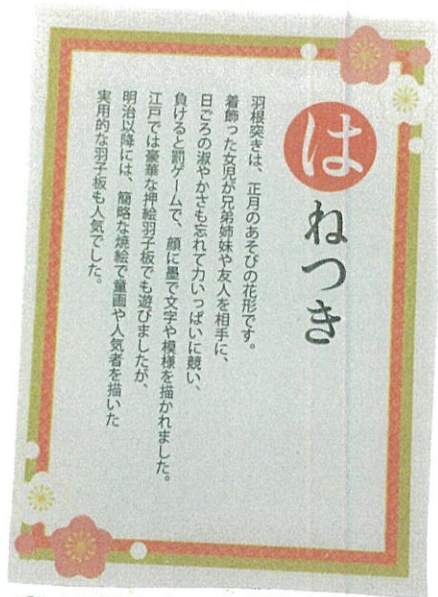
受付デスク回り、感想のボード



会場の右半分の全景



会場の左半分の全景



① 羽根突きの表題と解説文



② 江戸時代の羽根突き遊戯



③ 江戸時代の羽子板 1



④ 江戸時代の羽子板 2



⑤ 明治～大正時代の羽子板



⑥ 明治時代の羽根突き遊戯



⑦ 明治時代の羽子板



⑧ 大正、昭和時代の羽根突き遊戯



⑨ 大正、昭和時代の羽子板



⑩ 大正～平成時代の羽子板



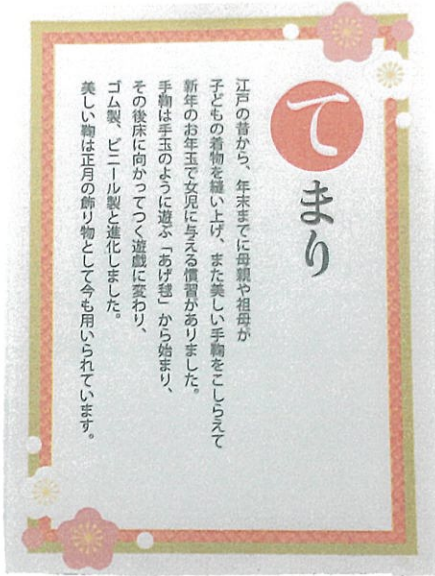
⑪ 平成時代の羽子板



⑫ 明治～大正時代の羽子板

展示品図像

手鞠つき



① 手鞠の表題と解説文



② 江戸時代の手鞠突き



③ 明治時代の手鞠遊び



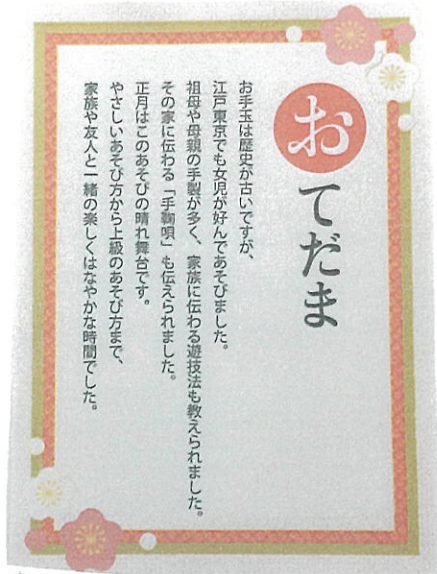
④ 明治時代以降の手鞠



⑤ 大正時代の手鞠あそび(竹久夢二)



⑥ 現代の手鞠



① お手玉あそびの表題と解説文



② 江戸時代の手玉のあそび



③ 明治、大正時代のお手玉のあそび



④ 現代のお手玉



⑤ 江戸時代の子ども遊び図 女兒編 (廣重画)



⑥ 江戸時代の子ども遊び図 男児編 (廣重画)



① 凧揚げの表題と解説文



② 江戸時代の凧揚げ遊戯



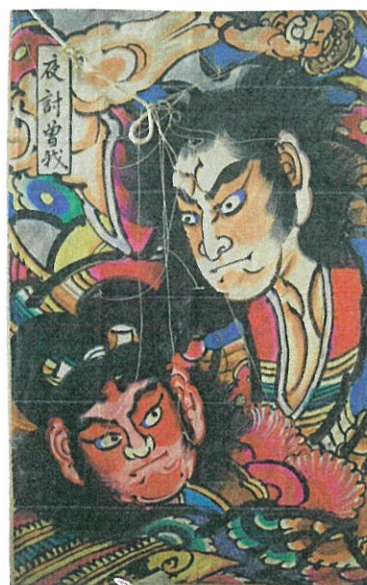
③ 江戸時代の凧揚げ遊戯画



④ 江戸時代の凧絵



⑤ 明治時代の凧揚げ遊戯



⑥ 昭和時代の武者絵の凧1



⑦ 昭和時代の武者絵の凧 2



⑧ 昭和時代の武者絵の凧 3



⑨ 昭和～平成時代の角凧



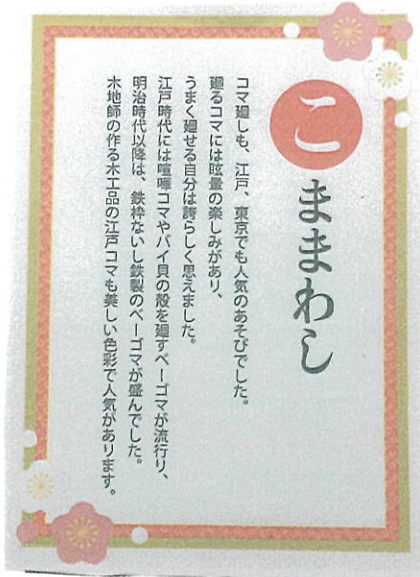
⑩ 奴凧



⑪ 三番叟型の凧



⑫ 七福神宝船の凧



① コマ廻しの表題と解説文



② 江戸時代のコマあそび



③ 江戸時代のバイ貝コマあそび



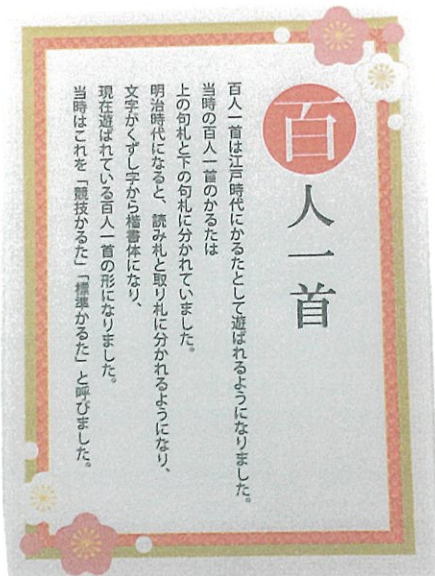
④ 明治時代以降のコマ



⑤ 昭和時代のペーコマ



⑥ 昭和期のコマあそび



① 百人一首の表題と解説文



② 江戸時代の百人一首遊び



③ 江戸時代のかるた1 (箱と包装布)



④ 江戸時代のかるた2 (読み札と取り札)



⑤ 明治・大正時代の百人一首遊び



⑥ 明治・大正時代のかるた会風景

展示品画像

百人一首のかるたあそび②



⑦ 明治時代のかるた 1 (箱)



⑧ 明治時代のかるた 2 (読み札と取り札)



⑨ 大正時代の女性遊戯図 1 (竹久夢二 1)



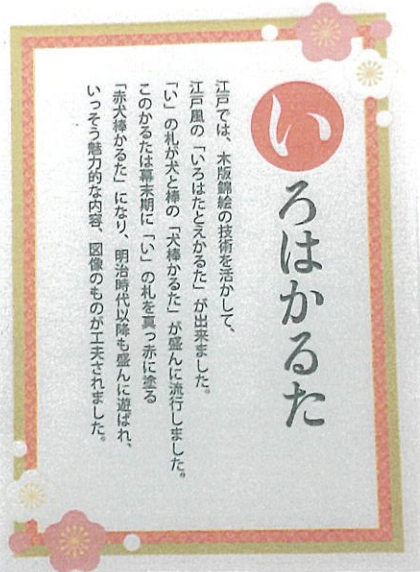
⑩ 大正時代の女性遊戯図 2 (竹久夢二 2)



⑪ 大正時代の女性遊戯図 3 (高島華育)



⑫ 競技かるた



① イロハかるた遊びの表題と解説文



② 天保年間の犬棒かるた



③ 慶應4年の赤犬棒かるた



④ 明治中期の赤犬棒かるた



⑤ 大正、昭和時代の犬棒かるた



⑥ 明治時代のイロハかるた遊戯

展示品画像

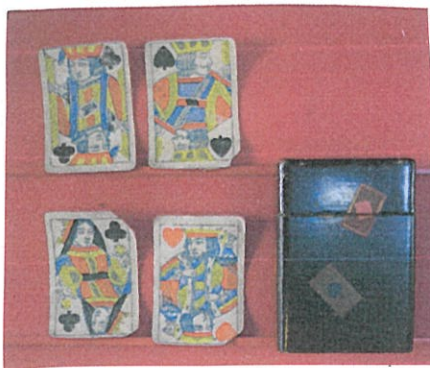
トランプのあそび①



① トランプの表題と解説文



② 江戸時代の阿蘭陀カルタとその原型



③ 鹿鳴館時代の西洋カルタと箱



④ トランプ解禁期の教則本 (3冊)



⑤ 明治20年代の子ども用トランプ



⑥ 国産第1号トランプ(山内任天堂)

展示品画像

トランプのあそび②



⑦ 大正時代のトランプあそび1 (竹久夢二)



⑧ 大正時代のトランプあそび2 (高島華宵)



⑨ 大正時代のトランプあそび3 (落谷虹児)



⑩ 大正時代のトランプあそび4 (加藤まさを)



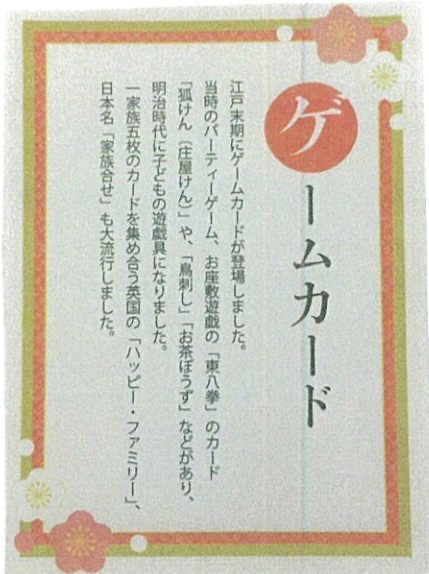
⑪ 大正時代のトランプ (ウィルキンソン社 PR トランプ)



⑫ 大正時代のトランプ絵葉書 (落谷虹児)

展示品図像

ゲームカードのあそび①



① ゲームカードの表題と解説文



② 江戸時代の藤八拳あそび



③ 江戸時代の拳あそび



④ 江戸時代の狐けんあそび



⑤ 明治時代の庄屋券(河鍋暁斎)



⑥ メンコになった庄屋券

展示品画像

ゲームカードのあそび②



⑦ 江戸時代の鳥刺しあそびカード



⑧ 江戸時代のお茶坊主あそびカード



⑨ 明治中期の風船かるた



⑩ 明治中期の食道楽家族合せ(村井玄齋)



⑪ 大正時代の家族合せカード



⑫ 有名画家自描画家族合せカード



① 馬のあそびの表題と解説文



② 競馬香 1



③ 競馬香 2



④ 七澤屋のミニチュア競馬香



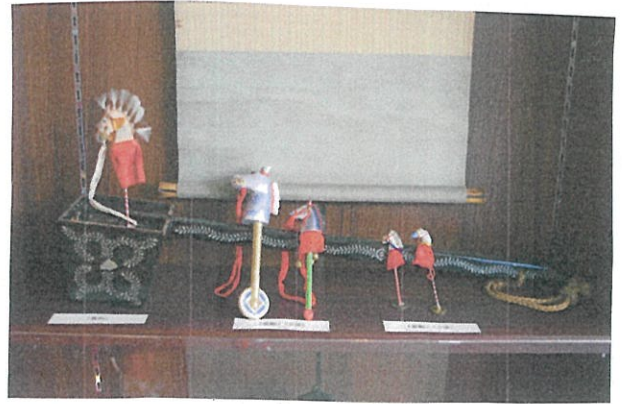
⑤ 馬の置物 3体



⑥ 競馬の遊戯 2点



⑦ 江戸時代の春駒のあそび



⑧ 春駒のミニチュア類



⑨ 古い竹馬姿の絵画軸



⑩ 大正、昭和の竹馬のあそび

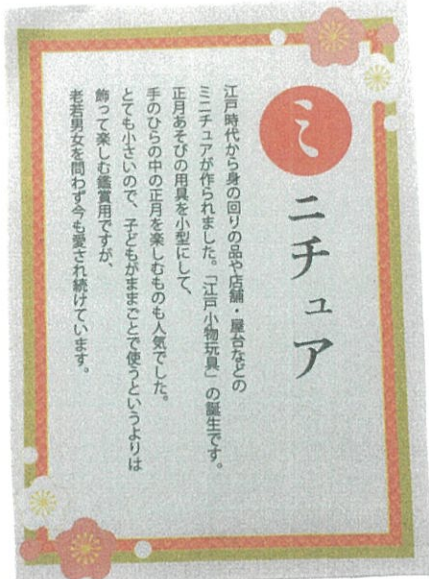


⑪ 祭礼神馬像など



⑫ 明治天皇乗馬姿人形

展示品画像 正月あそびのミニチュア①



① 正月あそびのミニチュアの表題と解説文



②七澤屋の雑道具 1 (貝桶・貝)



③七澤屋の雑道具 2 (碁盤・碁石)



④七澤屋の雑道具 3 (三曲)



⑤七澤屋の雑道具 4 (本棚・書物)



⑥百人一首のミニチュア (江戸時代、制作者不明)

展示品画像 正月あそびのミニチュア②



⑦ 江戸時代のままごとあそび



⑧ ミニチュアの正月風景



⑨ ミニチュア1 (門松)



⑩ ミニチュア2 (羽子板)



⑪ ミニチュア3 (食物)



⑫ ミニチュア4 (花札)



① すごろくの表題と解説文



② 江戸時代の金太郎双六あそび



③ 江戸時代の武者双六 (芳虎画)



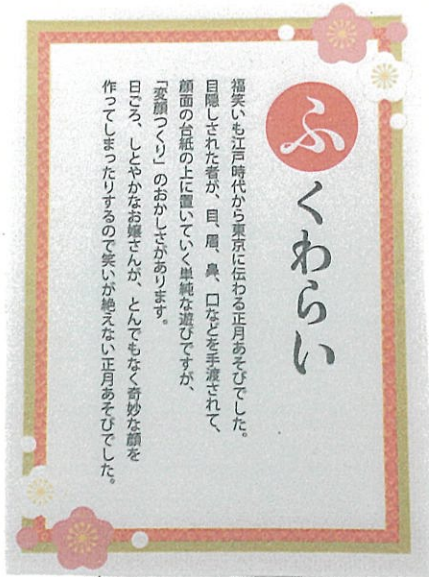
④ 江戸時代の道中双六 (廣重画)



⑤ 明治時代の双六遊び



⑥ 明治時代の令嬢成長双六



① 福笑いの表題と解説文



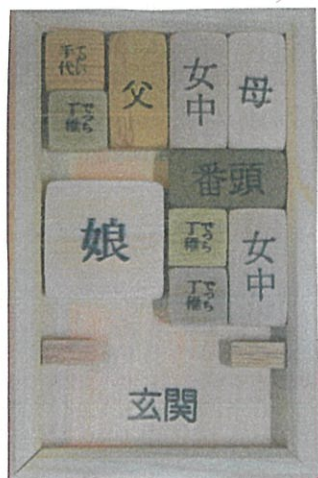
② 福笑い遊戯図



③ 江戸時代の福笑い(豊国画)



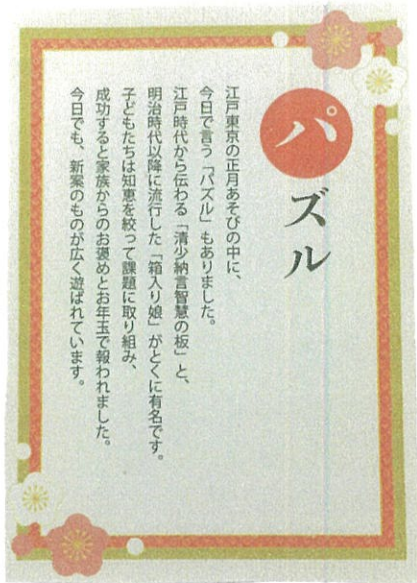
④ 江戸時代の福笑い包装紙



⑤ 箱入娘(現代)



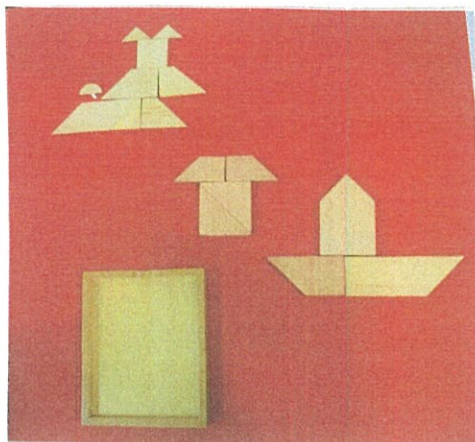
⑥ 横綱出陣(現代)



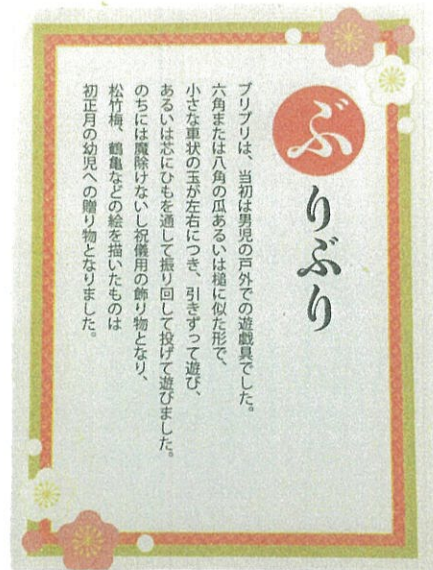
① パズルの表題と解説文



② 江戸時代の智慧の板セット



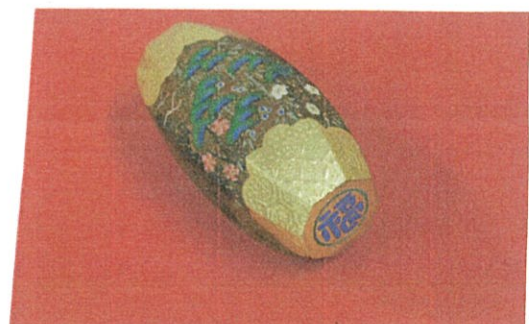
③ 現代のタングラム
(左上端は「智慧の板」の作例)



④ ぶりぶりの表題と解説文



⑤ 江戸時代のぶりぶりのあそび



⑥ 昭和時代のぶりぶりのミニチュア



① 碁の表題と解説文



② 碁盤と碁石



③ 将棋の表題と解説文



④ 将棋、禽将棋、軍人将棋



⑤ 碁、将棋の展示風景



⑥ 奥野かるた店の由来



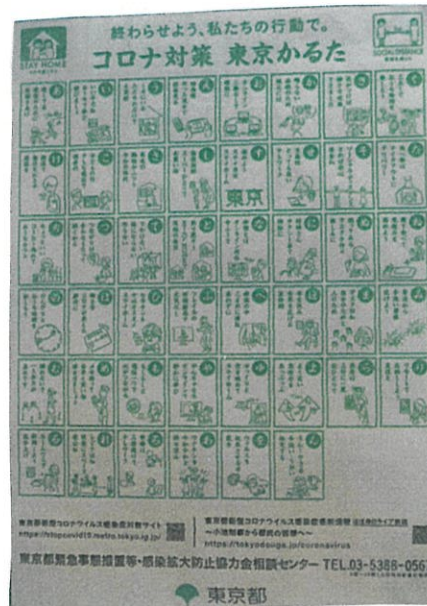
① コロナとかるたの表題と解説



② 平成年間の感染症カルタ (外箱)



③ 感染症かるたの箱と札



④ コロナ対策東京かるた (ポスター)



⑤ ウィズコロナ東京かるた1 (ポスター)



⑥ ウィズコロナ東京かるた (札)

展示品目録

今回の展示で出品した史料のリストです。冒頭に*印が付いているものは、図像編に写真があります。①②の数字は図像編の掲載番号です。

(1) 羽根突き

羽根突きは、正月のあそびの花形です。着飾った女兒が兄弟姉妹や友人を相手に、日ごろの淑やかさも忘れて力いっぱい競い、負けると罰ゲームで、顔に墨で文字や模様を描かれました。江戸では豪華な押絵羽子板でも遊びましたが、明治以降には、簡略な焼絵で童画や人気者を描いた実用的な羽子板も人気でした。

展示品

〈絵画史料〉

- *②「子供四季遊 春」(歌川貞廣画、天満屋喜兵衛刊、天保年間)
- 「風流十二氣候 睦月」(磯田湖龍齋画、版元不明、安永年間)
- 「豊歳五節句ノ遊」(国貞画、)
- 「子供あそび春けしき」(歌川國芳画、伊勢屋利兵衛刊、天保年間)
- 「大奥女性追い羽根遊戯図」(「千代田之大奥・追ひ羽根」・揚州周延画、福田初次郎刊、明治29年)
- *⑥「母子羽根突き遊戯図」(絵葉書、銀座上方屋刊、明治31年)
- 「卯年女兒羽根突き遊戯図」(絵葉書、昭和2年)
- 「女兒羽根突き待機図」(絵葉書、明治41年)
- 「姉弟妹羽根突き遊戯図」(絵葉書、明治30年代)
- 「日中少女羽根突き遊戯図」(絵葉書、明治30年代)
- 「男兒女兒に墨塗り図」(絵葉書、明治40年～大正6年)
- 「女兒男兒に墨塗り図」(絵葉書、大正3年)
- 「十二ヶ月の内一月、庭内遊戯圖」(山本松谷画、『風俗画報』180号、東陽堂刊、明治32年)
- 「庭の羽子」(『風俗画報』392号、浜田如洗画、東陽堂刊、明治42年)
- 「新年年始・追羽子の図」(遠藤耕溪画、『風俗画報』132号、東陽堂刊、明治31年)
- *⑧「新春女性羽根突き遊戯図」(高島華宵画、昭和4年)
- 「和装洋装女性と羽子板」(高島華宵画、昭和4年)

〈遊戯具〉

- *③「左義長羽子板」(制作者不明、江戸時代後期)
- *③「押絵羽子板」(制作者不明、江戸時代末期)
- *③「押絵羽子板」(制作者不明、江戸時代末期)
- *④「押絵羽子板・梅王丸」(制作者不明、江戸時代末期)

- *④「押絵羽子板・八重垣姫」(制作者不明、江戸時代末期)
- *④「押絵羽子板」(制作者不明、江戸時代末期)
- *⑤「押絵羽子板・弁慶」(勝文斎(四代)作、明治26年)
- *⑫「押絵羽子板・徳川家康」(勝文斎(四代)作、明治時代)
- *⑫「押絵羽子板・曾我五郎」(大和屋吟光作、明治時代)
- *⑫「羽子板・狐忠信」(勝文斎(五代)作、大正時代)
- *⑤「押絵羽子板・宝船」(勝文斎(五代)作、大正時代)
- *⑦「押絵羽子板・お三輪」(大和屋吟光作、明治時代)
- *⑦「押絵羽子板・助六」(大和屋吟光作、明治時代)
- *⑦「押絵羽子板・御所五郎藏」(大和屋吟光作、明治時代)
- *⑤「押絵羽子板・太郎冠者」(大和屋吟光作、明治時代)
- *⑩「押絵羽子板・矢の根」(京極琴山作、平成時代)
- *⑩「押絵羽子板・元禄ぶり」(吉田永光作、大正3年)
- *⑩「押絵羽子板・若衆」(吉田永光作、大正9年)
- *⑨「押絵羽子板・娘道成寺」(吉田永光作、大正時代～昭和時代初期)
- *⑨「押絵羽子板・淀君」(吉田永光作、大正時代～昭和時代初期)
- *⑨「押絵羽子板・吉田の松若」(吉田永光作、大正時代～昭和時代初期)
- *⑪「押絵羽子板・碓知盛」(京極琴山作、平成時代)
- *⑪「押絵羽子板・二条城の清正」(西山鴻月(初代)作、平成時代)
- *⑪「押絵羽子板・佐倉宗吾」(西山鴻月(二代)作、平成時代)
- *⑪「押絵羽子板・早野勘平」(加藤勝山作、平成時代)

(2) 手鞠つき

昔から、年末までに母親や祖母が子どもの着物を縫い上げ、また美しい手鞠をこしらえて新年のお年玉で女兒に与える慣習がありました。手鞠は手玉のように遊ぶ「あげ毬」から始まり、その後床に向かってつく遊戯に変わり、ゴム製、ビニール製と進化しました。美しい鞠は正月の飾り物として今も用いられています。

展示品

〈絵画史料〉

- *②「子寶五節遊」(鳥居清長画、版元不明、天保年間)
- *③「子供風俗・手鞠」(宮川春汀画、秋山武右衛門刊、明治29年)
- 「少女手鞠遊戯図(絵葉書)
- *⑤「少女手鞠突き遊戯図」(『中山晋平作曲全集』表紙絵・竹久夢二画、山野楽器店刊、昭和5年)
- 「まゆ玉下少女手鞠突き遊戯図」(絵葉書、昭和8年～)
- 「四時の流行 はつとし」(年賀風景・押絵羽根突き、手鞠)(『風俗画報』441号、東陽堂刊、大正2年)

〈遊戯具〉

- *④「手鞠」(5点)(制作者不明、明治時代)
- *⑥「手鞠」(7点))(制作者不明、昭和時代)

(3) お手玉あそび

お手玉は歴史が古いですが、江戸東京でも女兒が好んであそびました。祖母や母親の手製が多く、家族に伝わる遊技法も教えられました。その家に伝わる「手鞠唄」も伝えられました。正月はこのあそびの晴れ舞台です。やさしいあそび方から上級のあそび方まで、家族や友人と一緒に楽しくはなやかな時間でした。

展示品

〈絵画史料〉

- *②江戸時代の手玉のあそび(廣重画、「風流をさなあそび」女兒編、越前屋喜兵衛刊、天保初期)
- *③新年手鞠お手玉遊戯図(絵葉書)
- *⑤「風流をさなあそび」女兒編(歌川廣重画、越前屋喜兵衛刊、天保初期)
- *⑥「風流をさなあそび」男兒編(歌川廣重画、越前屋喜兵衛刊、天保初期)

〈遊戯具〉

- *④「お手玉」(1組5点)(現代)

(4) 凧あげ

凧あげは、江戸の昔から正月の男兒のあそびの花形です。冬季の空っ風の中で、子どもたちの夢を乗せて凧は空を舞いました。四角い江戸凧や奴凧が人気でした。各家庭、親せき、寺子屋などの男兒向けのお年玉でした。道路での凧あげは禁止でしたが、広場、校庭、河原などの開放空間では今もあそばれています。

展示品

〈絵画史料〉

- 「凧の風景」(「五節句之内睦月」・一勇齋國芳画、遠州屋又兵衛刊、弘化年頃)
- *③「凧揚げ図」(悠々齋筆、江戸時代中期)
- *②「子供あそび春けしき」(歌川國芳画、伊勢屋利兵衛刊、天保年間)
- 「各種凧尽くし図」(一壽齋芳員画、有田屋清右衛門刊、嘉永6年)
- 「新版きりぬき凧づくし」(歌川芳藤画、辻岡屋文助刊、嘉永2~3年頃)
- 「恵方詣、住吉詣、春遊びの圖」(初詣風景、凧あげ、落下傘)(永年苔石画、『風俗画報』83号、東陽堂刊、明治28年)
- 「江戸期手習師匠への年始」(凧・羽子板のお年玉)(『風俗画報』307号、東陽堂刊、明治38年)
- *⑤「武者絵角凧遊戯図」(絵葉書、大正6年以前)
- 「凧揚げと羽根突き図」(絵葉書、大正13年)
- 「複葉機絵角凧と日の出絵羽子板青年男女図」(絵葉書、『小学五年生』新年号附録、昭和14年)

- *⑤「昇竜絵角凧の遊戯図」(絵葉書、明治40年～大正6年)
- 「満洲平原での凧揚げ遊戯図」(絵葉書、昭和8年以降)

〈遊戯具〉

- 「凧絵・牛若丸」(制作者不明、江戸時代末期)
- *④「凧絵・自来也と蝦蟇の精」(制作者不明、江戸時代末期)
- *⑧「角凧・五條橋」(橋本禎造作、昭和時代中期)
- *⑦「角凧・義経八艘飛」(橋本禎造作、昭和時代中期)
- *⑦「角凧・牡丹に唐獅子」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑫「角凧・七福神宝船」(橋本禎造作、昭和59年)
- *⑦「角凧・一の谷合戦」(橋本禎造作、昭和時代中期)
- *⑦「角凧・一の谷合戦」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑦「角凧・一之谷合戦」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑥⑧「角凧・夜討曾我」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑧「角凧・曾我兄弟」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑧「角凧・本能寺」(橋本禎造作、昭和時代中期)
- *⑧「六角凧・鍾馗」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑩「奴凧」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑪「三番叟凧」(橋本禎造作、昭和時代後期)
- *⑨「角凧・龍虎」(今井龍谷作、昭和時代中期)
- *⑨「角凧・扇の的」(沼倉寅治作、平成9年)
- *⑨「角凧・一の谷合戦」(今井龍谷作、昭和時代後期)
- *⑩「角凧・七福神宝船」(沼倉寅治作、平成9年)
- 「角凧・曾我兄弟」(沼倉寅治作、平成時代)
- *⑨「角凧・龍虎」(沼倉寅治作、平成時代)
- 「角凧・牡丹に唐獅子」(沼倉寅治作、平成時代)
- 「奴凧(赤)」(沼倉寅治作、平成時代)
- 「奴凧(青)」(沼倉寅治作、平成時代)

(5) コマ廻し

コマ廻しも、江戸、東京でも人気のあそびでした。廻るコマには眩暈の楽しみがあり、うまく廻せる自分は誇らしく思えました。江戸時代には喧嘩コマやバイ貝の殻を廻すベーゴマが流行り、明治時代以降は、鉄枠ないし鉄製のベーゴマが盛んでした。木地師の作る木工品の江戸コマも美しい色彩で人気があります。

展示品

〈絵画史料〉

- *②「曲ゴマ、喧嘩コマ遊戯図」(歌川芳虎画、上州屋金蔵版、幕末期)
- 「子供遊勇當独楽・喧嘩コマ」(こどもあそび いさむあてごま)(絵師不明、版元不明、幕末頃)

*③「バイ貝コマで遊技する男児」（「飛脚仲二 嵐吉三郎」春好齋北洲画、本屋清七刊、文政3年）

「バイ貝コマで遊技する童男(わらべ）」（文部省刊「衣喰住之内家職幼絵解圖」、明治初年）」

*⑥「男児けんか独楽遊戯図」（制作者不明、『小学三年生』正月号附録、昭和26年）

〈遊戯具〉

*④「江戸コマ」（5点）（制作者不明、明治時代）

*④「鉄輪コマ」（2点）（制作者不明、昭和前期）

*⑤「ベーゴマ」（3点）（制作者不明、昭和前期）

（6）百人一首かるたのあそび

百人一首は江戸時代にかるたとして遊ばれるようになりました。当時の百人一首のかるたは上の句札と下の句札に分かれていました。明治時代になると、読み札（全句）と取り札（下の句）に分かれるようになり、文字がくずし字から楷書体になり、現在遊ばれている百人一首の形になりました。当時はこれを「競技かるた」「標準かるた」と呼びました。

展示品

〈絵画史料〉

*②江戸時代の哥かるたのあそび（廣重画、「風流をさなあそび」女兒編、越前屋喜兵衛刊、天保初期）

*⑨「わが世の春」（竹久夢二、『婦人生活』7巻1号表紙絵、明治45年）

*⑤「百人一首かるた少女源平戦遊戯図」（絵葉書、明治30年代）

*⑥「百人一首かるた夫婦遊戯図」（絵葉書、飯澤天洋画、大正5年）

*⑥「百人一首かるた小児読み手の夫婦遊戯図」（絵葉書、明治40年～大正6年）

*⑥「百人一首かるた男女交際遊戯図」（絵葉書、飯澤天洋画、大正5年）

*⑩「カルタ会図」（竹久夢二画、大正8年）

*⑪「かるたとる日よ」（高島華宵画、大正末期頃）

〈遊戯具〉

*③④百人一首かるた」（手描き、制作者不明、江戸時代後期）

*⑦⑧「百人一首かるた」（機械木版、制作者不明、明治時代）

*⑫「百人一首標準かるた」（印刷版、大石天狗堂製、昭和前期）

（7）イロハかるたのあそび

江戸では、木版錦絵の技術を活かして、江戸風の「いろはたとえかるた」が出来ました。

「い」の札が犬と棒の「犬棒かるた」が盛んに流行しました。このかるたは幕末期に

「い」の札を真っ赤に塗る「赤犬棒かるた」になり、明治時代以降も盛んに遊ばれ、いっそう魅力的な内容、図像のものが工夫されました。

展示品

〈絵画史料〉

「風流をさなあそび、男児編、女児編」（歌川広重画、越前屋喜兵衛刊、天保初期）

「イロハカルタ」（歌川芳藤画、小林泰治郎刊、文久1年）

*⑥「かるた遊び」（『風俗画報』307号、東陽堂刊、明治38年）

〈遊戯具〉

*②「初期犬棒かるた」（作者不明、発行元不明、天保年間頃）

「犬棒かるた」（村井省三氏旧蔵）（作者不明、発行元不明、幕末～明治前期）

「初期赤犬棒いろはかるた」（歌川芳藤画、文正堂刊、文久1年）

*③「初期赤犬棒かるた」（作者不明、発行元不明、慶應4年）

*④「赤犬棒かるた」（作者不明、発行元不明、明治中期）

*⑤「藤村イロハかるた」（島崎藤村作、岡本一平画、實業之日本社刊、大正15年）

「イロハカルタ」（キンダーブック附録、昭和4年）

*⑤「いろはかるた犬ぼう」（武井武雄画、鈴木仁成堂刊・奥野かるた店復刻版、昭和10年）

*⑤「キリガミいろはカルタ」（安野光雅作、新泉社、昭和54年）

（8）トランプのあそび

西欧のトランプは明治時代に英米から輸入されました。最初は「西洋カルタ」、間もなく「トランプ」と呼ばれました。すぐに子どもの正月あそび用具になり、「ババ抜き」、「七並べ」、「神経衰弱」などが流行しました。その後国産化も進み、大人の女性にも、近代西洋の文化の香りがするあそびとして愛好されました。

展示品

〈絵画史料〉

「日の丸・少女・トランプ」（絵葉書、大正7年～昭和7年）

*⑨「黒猫、トランプ少女一人遊び図」（落谷虹児画、昭和3年）

*⑦「トランプ鳥籠下女性遊戯図」（竹久夢二画、大正後期）

「トランプ女性物思い図」（呉羽麓郎画、大正末期）

*⑧「トランプ女性椅子座り遊戯図」（高島華宵画、大正末期頃）

「トランプ少女遊戯図」（竹久夢二画、大正15年）

*⑩「トランプ女性一人遊び図」（加藤まさを画、大正年間）

「トランプ少女図」（竹久夢二画、「春のおくりもの」、昭和3年）

「トランプ・シャッフル場面図」（絵葉書、石渡風古画、大正4年）

「かるた」（トランプ少女一人遊び図）（絵葉書、村上三千穂画、大正8年～昭和8年）

〈遊戯具〉

*②「宇田川楊庵模写トランプ」（宇田川楊庵画、私家版・津山市洋学資料館複製、

江戸時代後期)

- *②「阿蘭陀カルタ」(楊庵模写原本、ティンマーマン社製、1798年)
- *③「鹿鳴館時代のトランプと容器(ベルギー製トランプ、日本製木製収納箱、明治10年代)
- *④「解禁期の遊戯指南書」(3点)(團々社及び上方屋、明治20年頃)
- *⑤「子ども向け木版トランプ」(山崎勇高作・刊、明治20年)
- *⑥「国産第一号トランプ」(山内任天堂製、明治35年)
- *⑦「ウィルキンソン社広告トランプ・収納箱」(ドラリュウ社製、日本製収納箱の制作者は不明、大正時代)
- *⑫「トランプ絵・クイーン」(落谷虹児画、上方屋平和堂刊、大正後期)

(9) ゲームカードのあそび

江戸末期にゲームカードが登場しました。当時のパーティーゲーム、お座敷遊戯の「東八拳」のカード「狐けん(庄屋けん)」や、「鳥刺し」「お茶ぼうず」などがあり、明治時代に子どもの遊戯具になりました。一家族五枚のカードを集め合う英国の「ハッピー・ファミリー」、日本名「家族合せ」も大流行しました。

展示品

〈絵画史料〉

- *②「藤八拳(東八拳)遊戯図」(制作者不明、幕末期)
- *③江戸時代の拳あそび
- *④江戸時代の狐拳あそび(歌川芳藤画、彫正刊、弘化4年)

〈遊戯具〉

- *⑦「鳥刺し遊戯カード」(うなみ荘旧蔵品)(制作者不明、幕末期)
- *⑧「お茶ぼうず遊戯カード」(中野区民俗資料館蔵)(制作者不明、幕末期)
- 「役者合せカード」(うなみ荘旧蔵品)(制作者不明、明治10年代)
- *⑤「庄屋けん遊戯カード」(河鍋暁斎画、榛原商店刊、明治10年代)
- 「新發明狐けん」(制作者不明、発行元不明、明治10年代)
- *⑨「風船かるた」(やまと新聞附録、明治23年)
- *⑥「初期丸型庄屋券」(制作者不明、明治30年頃)
- *⑥「初期チビメン」(制作者不明、明治10年代)
- *⑩「食道楽家族合」(村井弦斎作、明治30年代)
- *⑫「著名画家自描画家家族合せ」(落谷虹児等7名画、制作者不明、大正末期頃)

(10) 馬のあそび

正月のあそびに、馬と戯れるものがあります。江戸には、大人に乗馬はじめがあれば、子どもにも着飾って馬に乗るあそびがありました。また、正月には、生活に欠かせない友であった馬との関係を飾る「初馬」や「白馬節会」などの行事や神事があり、子どもには、「春駒」や「竹馬」の遊びがありました。

展示品

〈絵画史料〉

- *⑦「春駒のあそび」(揚州周延画、明治26年)
- 「賀茂くらべ馬」(伊東紅雲筆、大正時代)
- 「古絵馬図」(西沢笛畝作、大正時代)
- 「子供遊踊盡・今様春駒」(溪齋英泉画、和泉屋市兵衛刊、天保年間頃)
- 「子供あそび・打毬」(歌川貞房画、岡崎屋茂兵衛刊、天保年間)
- 「打毬合戦双六」歌川芳綱画、版元不明、嘉永5年)
- 「子供遊竹馬盡し」(作者不明、版元不明、慶應4年)
- 「軍服着用新春初騎乗図」(絵葉書、明治30年代)
- *⑩「竹馬遊び・奴胤持ち・羽子板持ち図」(絵葉書、大正7年～昭和7年)

〈遊戯具〉

- *②③「競馬香」(制作者不明、明治時代)
- *④「競馬香」(七澤屋、江戸時代末期)
- 「春駒遊びの御所人形」(永徳齋作、明治時代)
- *⑧「春駒」(5体、制作者不明)
- 「春駒遊び賀茂人形」(制作者不明)
- *⑨「春駒の掛軸2本・巖谷小波画」
- *⑨「馬杓」(制作者不明)
- *⑫「明治天皇(幼年期)騎乗姿人形」(明治時代)
- *⑤「唐鞍神馬」(制作者不明、昭和6年)
- *⑤「祭礼神馬」(制作者不明)
- 「練習用木馬」(制作者不明)
- *⑪「口取と神馬」(制作者不明)
- *⑥「PONY RACE」
- *⑥「走る競馬ゴール」
- 「JUE DE COUSE」

(11) 正月あそびのミニチュア

江戸時代から身の回りの品や店舗・屋台などをミニチュアが作られました。「江戸小物玩具」の誕生です。正月あそびの用具を小型にして、手のひらの中の正月を楽しむものも人気でした。とても小さいので、子どもがままごとで使うというよりは飾って楽しむ鑑賞用ですが、老若男女を問わず今も愛され続けています。

展示品

〈絵画史料〉

- 「正月風俗図屏風」(六曲一隻)(江戸時代前期)
- *⑦「四季の詠おさな遊六月富士詣の夕立」(溪齋英泉画、蔦屋吉蔵刊、天保年間)

- 「四季の詠おさな遊初冬十月十一月の詠」(溪齋英泉画、蔦屋吉蔵刊、天保年間)
 「新板世帯道具尽」(錦盛画、版元不明、安政年間)
 「新板おざ敷道具尽」(歌川芳藤画、小林泰治郎刊、安政6年)
 「よりぬきサザエさん2」(長谷川町子作、姉妹社刊、昭和後期)

〈遊戯具〉

- *②「貝桶・貝覆い 雑道具」(七澤屋製、江戸時代後期)
- *③「碁盤 雑道具」(七澤屋製、江戸時代後期)
- *④「三曲(琴・三味線・胡弓) 雑道具」(七澤屋製、江戸時代後期)
- *⑤「本箱・書物 雑道具」(七澤屋製、江戸時代後期)
- *⑥「百人一首ミニチュア」(江戸時代～現代)
- *⑦「武者かるたミニチュア」(明治時代)
- *⑧「正月遊戯具各種ミニチュア」(凧、独楽、手鞠、お手玉、碁盤、投扇興、けん玉、だるま落とし、ボードゲーム、トランプ、ジグソーパズル等、制作者不詳、明治時代～現代)
- *⑨「正月飾り・門松ミニチュア」(制作者不明、現代)
- *⑩「正月遊戯具ミニチュア・羽子板」(制作者不明、現代)
- *⑪「正月果物、菓子ミニチュア」(制作者不明、現代)
- *⑫「正月遊戯具・花札ミニチュア」(制作者不明、現代)

(12) 双六のあそび

江戸時代に、木版の紙双六が盛んに使われました。振出しから上がりまでをサイコロを振って競う「道中双六」が人気でした。武者絵を描いた「武者双六」、妖怪を並べた「お化け双六」、かるたをコマにした「イロハかるた双六」などもありました。明治時代以降には、学童や少女の成長を主題にした双六も流行しました。

展示品

〈絵画史料〉

- *②「金太郎双六遊」(鳥居清満画、西村屋与八刊、文政年間)
- 「四季の安曾比幼稚寿語録」(小園画、森本順三郎刊、明治28年)
- *⑤「児童雙陸遊の圖」(山本松谷画、『風俗画報』202号、明治33年)

〈遊戯具〉

- *③「英勇揃伊呂波雙六」(一猛斎芳虎画、伊勢屋兼吉刊、弘化年頃)
- *④「浮世道中膝栗毛滑稽雙六」(一立齋廣重画、恵比寿屋庄七刊・奥野かるた店復刻版、安政2年)
- 「伊呂波たとへ双六」(一風齋歌川國明画、辻岡屋文助板、安政6年)
- 「四季のあそび幼児寿語録」(画工不明、森本順三郎板、明治28年)
- *⑥「令嬢成長雙六」(永井清治郎画、大丸呉服店刊、明治43年)

(13) 福笑いと箱入娘

福笑いも江戸時代から東京に伝わる正月あそびでした。目隠しされた者が、目、眉、鼻、口などを手渡されて、顔面の台紙の上に置いていく単純な遊びですが、「変顔づくり」のおかしさがあります。日ごろ、しとやかなお嬢さんが、とんでもなく奇妙な顔を作ってしまったりするのので笑いが絶えない正月あそびでした。「箱入娘」は明治時代以降に流行したパズルです。現代では、その変形として「横綱出陣」なども盛んに遊ばれています。

展示品

〈絵画史料〉

*②「祖父と孫たち福笑い遊戯図」(絵葉書)

「福笑い遊戯図」(絵葉書)

〈遊戯具〉

*③「福笑い」(歌川豊国画、版元不明、弘化年間頃)

*④「福笑い」包装紙(歌川豊国画、版元不明、弘化年間頃)

*⑤「箱入娘」(飛騨高山おはなもあな作、現代)

*⑥「箱入娘変化形・横綱出陣」(制作者不明、現代)

(14) パズルとぶりぶり

江戸東京の正月あそびの中に、今日で言う「パズル」もありました。江戸時代から伝わる「清少納言智慧の板」と、明治時代以降に流行した「箱入り娘」がとくに有名です。子どもたちは知恵を絞って課題に取り組み、成功すると家族からのお褒めとお年玉で報われました。今日でも「タンگرام」として遊ばれています。「ぶりぶり」は、当初は男児の戸外での遊戯具として使われました。六角又は八角の瓜又は榎に似た形で、小さな車状の玉が左右につき、引きずって遊び、あるいは芯にひもを通して振り回して投げて遊びました。後には、魔除けないし祝儀用の飾り物となり、松竹梅鶴亀などの絵を描いたものは初正月の幼児への贈り物となりました。

展示品

〈絵画史料〉

*⑤「ぶりぶり遊戯図」(「扁額軌範」、寛文2年)

〈遊戯具〉

*②「清少納言智慧の板」(制作者不明、江戸時代末期)

*③「タンگرام」(制作者不明、現代)

*⑥「ぶりぶり」(吉田永光作、昭和時代初期)

(15) 囲碁と将棋

正月の大人の男性のあそびに囲碁がありました。ゆったりとした時間の流れの中で、家族や親しい碁敵と碁盤を囲みます。碁石を取った、取られたのやり取りもたまらなく楽しい

ものでした。町内の名人戦であってもザル碁であっても、あるいは五目並べなどでも、上級者も初心者も楽しめたし、碁石を打つ時の明るい音も正月に映えました。囲碁は絵になる大人、子どもの正月あそびです。江戸東京の正月あそびには将棋も欠かせません。初心者でも、正月の将棋では、駒音も普段より大きく、元気いっぱいです。待った、待てない、詰んだ、詰まないの大騒ぎで大人が将棋盤から離れた後には子どもたちが寄ってきて、今度は周り将棋や将棋倒しが始まります。「奥野かるた店」は、明治時代の有名な将棋棋士で駒師だった奥野一番の息子徳太郎が大正時代に始めた将棋の店、「奥野一番商店」から出発しています。

展示品

〈遊戯具〉

- *②「碁盤」（一面、制作者不明）
- *④「将棋盤」（一面、制作者不明）、「軍人将棋」（一組、現代）、「禽将棋」（一組、現代）
- *⑤「囲碁・将棋」展示風景
- *⑥奥野かるた店の由来

（16）特別展示：正月あそびとコロナ

「感染症かるた」は、遊びながら感染症の勉強になるように、三年前に制作されました。「コロナ対策東京かるた」や「ウィズコロナ東京かるた」も、コロナ対策の自粛期間に、巣ごもりする家族向けに考案されました。どちらにも、コロナウィルスには、偏見と差別ではなく科学と友愛で立ち向かおうという、遊戯の世界からの連帯のアピールがあります。

展示品

〈絵画史料〉

- *④「コロナ対策東京かるたポスター」（東京都制作、ネット配信をプリント・アウト、令和2年）
- *⑤「ウィズコロナ東京かるたポスター」（東京都制作、ネット配信をプリント・アウト、令和2年）

〈遊戯具〉

- *②③「感染症かるた」（岡田春恵作、奥野かるた店刊、平成29年）
- *⑥「ウィズコロナ東京かるた」（東京都制作、ネット配信を工作、令和2年）

企画展『千代田の春・江戸東京の正月あそび』研究会報告書

2021年1月29日発行

著者：「千代田の春・江戸東京の正月あそび展」実行委員会

発行者：「千代田の春・江戸東京の正月あそび展」実行委員会

発行所：株式会社奥野かるた店（代表取締役奥野誠子）

〔101-0051〕東京都千代田区神田神保町2-26

Tel.03-3264-8031/ Fax.03-3230-1512